



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3763号 2017.7.9 発行

ユニバーサルデザイン知って 流山市立森の図書館で企画展 東京新聞 2017年7月9日



いろいろなユニバーサルデザインの製品に触れられる企画展＝流山市で

年齢や性別、障害の有無などにかかわらず、誰にとっても使いやすい「ユニバーサルデザイン（UD）」を学び、体感できる企画展が、流山市立森の図書館で開かれている。

展示では、UDの歴史、「分かりやすさ」「安全性」といった七原則、市内の駅や家などの身近で活躍しているUD、二〇二〇年の東京五輪・パラリンピックに向けた取り組みなどを、八点のパネルで紹介。

UDの製品も展示しており、上部が握りやすい多面体で、商品名などが点字で表示されているジャムの瓶などに触れて、使いやすさを確かめられる。小中学生向けに図書館でのUDの調べ方の手引きや、調査シートもある。

昨年四月施行の障害者差別解消法により、一人一人の困り事に対応する「合理的配慮」が、行政や事業者に求められるようになり、同図書館は昨年十二月、図書館のバリアフリーの試みを紹介する企画展を開催。障害のある子どもの親らから好評だったことを受け、UD展を企画した。

パネルなどは職員が資料や街中を実際に調べて制作した。担当者は「私たちの気付かないところでUDは浸透していて、子どもたちが気付くきっかけになれば」と話している。

入場無料。三十一日まで。休館は十、十八日。問い合わせは同図書館＝電04（7152）3200＝へ。（飯田克志）

初のアール・ブリュット展 あすまで武蔵野市内4カ所

東京新聞 2017年7月9日

個性的な作品が並ぶ「武蔵野アール・ブリュット2017」＝武蔵野市で

武蔵野市初の本格的なアール・ブリュットの作品展「武蔵野アール・ブリュット2017」が、吉祥寺美術館（吉祥寺本町1）など市内4カ所で開かれている。120点余りの個性あふれる絵画や立体作品などが展示され、訪れた人々の目を楽しませている。10日まで。（鈴木貴彦）



アール・ブリュットは「生（き）の芸術」と

もいわれ、障害の有無にかかわらず、美術の専門教育を受けていない人たちによる自発的表現のこと。市内ではこれまで、障害者らの事業所ごとに展示されてきたが、芸術性の高い作品をもっと多くの人に見てもらおうと企画された。

今年一月、「武蔵野市にゆかりのある人」という緩やかな応募条件で公募したところ、市内外から百九十八点の作品が集まった。写真による第一次審査で百二十点に絞り、二次審査で美術館に展示する約六十点を選んだ。

絵画が多いが、大きさや色合い、作風など、どれも個性的。段ボールの切れ端にボールペンや油性マジックで米ニューヨークの街を精密に描いた作品や、電車の正面（顔）を無数に描いて一枚の織物のように表現した絵など、印象的な作品が並ぶ。

全身が黄色のカラフルなゴジラなど立体作品も。練馬区の大学生斉藤彩香さん（21）は「色づかいが豊かで力強く、楽しい作品が多いのに驚きました」と感激していた。

八日、表彰式であいさつした邑上（むらかみ）守正市長は「今後も武蔵野からアール・ブリュットを発信していきたい」と語った。美術館展示作品以外の第一次審査通過作品も「ギャラリー永谷1」など吉祥寺のギャラリー三カ所で展示されている。入場無料。

### 障全協みやざき結成 総会で活動方針案承認

関係者から応援のたすきを受け取り笑顔を見せる川越さん(右)

障害者の生活と権利を守る宮崎連絡協議会（障全協みやざき）の結成総会が8日、宮崎市民文化ホールで開かれた。県内外から障害者とその家族ら約40人が出席し、医療や福祉の充実、地域での孤立防止などに取り組むとした活動方針案を承認した。

障全協みやざきは全国連絡協議会の地方加盟組織で、結成は全国で33番目。会長に就き、自身も障害を持つ川越賢二さん（51）（宮崎市）らが今年2月に準備会をつくり、他の障害者らに参加を呼びかけてきた。

全国連絡協議会は1967年、障害者とその家族、関係者らで結成。生きる、学ぶ、働く、政治参加という四つの権利を掲げる。障害の違いを乗り越え、人間らしく生きられる社会を目指すため、国などに様々な施策の拡充を求めている。

活動方針には、市町村の地域防災計画の拡充と改善、公共交通機関の利便性の向上、専門家らと協力した相談会の実施の検討などを盛り込んでいる。障全協みやざきの役員人事案も承認され、川越会長は「課題は山積しており、一つ一つ解決していくために頑張ります」と語った。

総会に先立ち、全国連絡協議会の中内福成会長が「すべての障害者が手をつなぎ尊厳を守りぬこう」と題して記念講演。障全協みやざきと一緒に活動に取り組むことを確認した

読売新聞 2017年07月09日



### 障害者に作る喜びを

読売新聞 2017年07月09日

さをり織りや陶芸の作品が並ぶギャラリー（田辺市で）

◇田辺で3施設 陶芸・織物展示即売会

障害者による陶芸品と織物の合同展示即売会「第1回南紀ものづくりまるしえ」が、田辺市湊のギャラリー「寿苑」で開かれている。同市と西牟婁郡内の福祉3施設が協力し「障害者に創作のやりがい」を」と初めて企画した。10日まで。

出品したのは、南紀あけぼの園（上富田町岩田）、日置川みどり園（白浜町大古）、ふたば作業所（田辺市文里）の計26人。物づくりに取り組む施設が協力すれば、多くの人に関心を持ってもらえるの



では、と7日から開いている。

あけぼの園とみどり園は陶芸を創作活動の中心にしており、皿やカップ、花瓶のほか、カップの置物など計約300点を出品。ふたば作業所では「さをり織り」を創作しており、カラフルなワンピースやストールなどのほか、ポーチやペンケースなど約100点が並ぶ。

あけぼの園の支援員、神人千由希さんは「作品を商品として販売できることは、障害者のやりがいや喜びにつながる。施設の交流を増やし、地域での様々な活動につなげていきたい」と話している。

午前10時～午後6時。最終日は午後3時まで。問い合わせは「寿苑」(0739・22・0477)。

## 障害者とヨットに乗り交流 立命館大イベント、参加児童「気持ちよかった」

産経新聞 2017年7月9日

障害のある人たちとヨットに乗って交流しようと、立命館大学ヨット部は8日、障害者を対象にしたヨットの試乗イベント「チャレンジヨット」を、同部の艇庫がある大津市柳が崎のヨットハーバー沖などで開いた。部員とヨットに乗った障害者らは、ヨットの乗り心地などを体験し、笑顔を見せていた。

障害のある人にもヨットを楽しんでもらおうと、同部が25年前から開いている毎年恒例の伝統行事。部員が中心となって企画し、京都府や滋賀県の特別支援学校に声をかけて参加希望者を募ったり、食事を振る舞ったりして交流している。

今年は8、9日の2日間にわたって開催。8日は障害者対象の放課後等デイサービスを行う団体など、京都府から約20人が参加。部員とヨットに乗り込んだ参加者らは、ヨットで帆走したり、湖上の景色を楽しんだり。降船後も、一緒に食事を取るなどして、交流を楽しんだ。

参加した小学3年の馬淵倖成くん(8)は「気持ちよかったし、お兄さんと話せて楽しかった」と笑顔で話していた。

同部の石田佑介主将(21)＝4年＝は「笑顔で感想を言ってもらえるとうれしくなる。障害のある方を乗せる時は、操船や、予測外の出来事に備える行動を考えたりするので、私たちが学ぶことが多い」と振り返っていた。

## 民生委員 高齢化深刻 「75歳未満」基準緩和相次ぐ

民生委員の仲間と打ち合わせをする浅野朝子さん(右)＝神奈川県藤沢市で

毎日新聞 2017年7月8日

地域福祉を支える民生委員・児童委員について、都道府県と政令市67自治体のうち2割にあたる15自治体が昨年未の改選時、年齢を国基準の「75歳未満」より引き上げて選任していたことが全国民生委員児童委員連合会の調査でわかった。見守りが必要な高齢の単身世帯は年々増加しているが、なり手が不足し、支える側も高齢者に頼らざるを得ない現状が浮き彫りになった。民生委員制度は今年、創設100年を迎え、9日には東京で記念大会が開かれる。

国は通知で民生委員の年齢要件を「75歳未満の者を選任するよう努めること」と規定。一方で各自治体の弾力的運用も認めている。同連合会は、昨年12月の3年に1度の全国一斉改選に合わせ、全国の実態を調べた。

神奈川県は年齢上限を撤廃した。青森県は78歳未満、岡山市は77歳未満としている。栃木県や埼玉県は「事情がある場合」に限るが、78歳未満まで認めている。こうした15自治体のほか、奈良県など8自治体は75歳未満を原則としながらも、理由書を提出す



れば75歳以上も可能としている。

民生委員の平均年齢は、2013年の民間調査で66歳。同連合会は昨年11月、体力の低下や認知症発症のリスクなどから「75歳未満が妥当」との見解を示した。一方で、多くの自治体が75歳以上も認めている現状を「地域の実情を踏まえるのが適当」とし、各自治体の判断に委ねる考えだ。

同志社大の上野谷加代子教授（ボランティア論）は「なり手を確保するために、PTAなど幅広い団体に声を掛けていくことが大事だ」と指摘する。

民生委員は厚生労働相が委嘱する非常勤の公務員。無報酬で高齢者や障害者の見守りや相談などにあたる。

まだ頑張りたい、77歳現役で活動

神奈川県藤沢市の民生委員、浅野朝子さん（77）は昨年12月、県や市が「75歳未満」という年齢要件を撤廃したため、地元の自治会長の推薦を受け、再任された。民生委員の活動を続け34年。「まだまだ自分も頑張りたい」と意欲を見せる。

日ごろは独居のお年寄りの見守りが中心だ。2011年の東日本大震災では、担当する10階建てのマンションのエレベーターが止まり、階段を何度も上り下りしてお年寄りの安否確認に駆け回った。車椅子のお年寄りが揺れに気が動転しているのを見つけ、1人で持ち上げてベッドに移し、落ち着かせた。

浅野さんは「民生委員は相手から幸せをもらえ、やりがいのある仕事。若い人も誘いを受けたらぜひ引き受けてほしい」と呼びかける。【熊谷豪】

#### 「地域の見守り」で協定 5郵便局と小城市

佐賀新聞 2017年07月09日



地域見守りの協定で三日月郵便局の百崎立局長（右から2人目）と握手を交わす江里口秀次小城市長（中央）＝小城市役所

住民や地域の異変に迅速に対応しようと小城市は3日、三日月郵便局など市内外5郵便局と見守り協力に関する協定を結んだ。江里口秀次市長は「住民が安心して暮らせる地域社会づくりを目指す上にも、郵便局のネットワークからいただく情報は心強い」と話した。

地域の見守りを目的にした県内自治体と郵便局の協定締結は小城市で7市町目。協定は5項目にわたり締結。高齢者障害者、子どもに関する見守り状況や道路損傷、不法投棄など市役所各課に情報を提供することになっている。

三日月郵便局の百崎立局長は「郵便局は合併後も旧4町にそのまま残り、地域とのつながりの強みを生かしたい」と協力を約束した。

#### ボランティア参加呼びかけ競技体験イベント 福井国体

中日新聞 2017年7月9日



少林寺拳法を体験する児童ら＝福井市のハピテラスで

二〇一八年の福井国体に向けた機運を高め、大会のボランティア参加を呼び掛ける「ハピリンピック2017」が八日、福井市のハピリンであった。

福井市市民協働・ボランティア推進課が主催。ハピテラスでは、国体でデモンストレーション競技となる少林寺拳法、スティックリング、エスキーツの三競技と全国障害者スポーツ大会でオープン競技となる卓球バレーの体験教室があり、各競技の関係者が指導した。

ガールスカウト福井県連盟第九団に所属し、オープニングでダンスを披露した吉沢茉莉

(まひろ)さん(8つ)は少林寺拳法を体験。「(競技の)名前は聞いたことはあったが、体験して少し興味を持てた」と話した。子どもだけでなく、親子で体験する姿も見られた。

四階の総合ボランティアセンターでは、一九六八(昭和四十三年)の福井国体を振り返るパネル、車いす陸上の高田稔浩さん(福井市役所勤務)がパラリンピックで獲得したメダルなどが並ぶ「昭和の福井国体とパラリンピックメダル展」も開かれている。展示は八月六日まで。(中場賢一)



#### 子ども食堂開設 手引書 読売新聞 2017年7月9日

◇縁創造センター 流れや事例紹介

県内の福祉団体でつくる「滋賀の縁創造実践センター」は、子ども食堂の開設手引書「遊べる・学べる淡海子ども食堂をはじめてみよう！」(B5判、17ページ)＝写真＝を2000部作成した。

全面カラーで、開設までの流れや実施団体の事例を集めた「先輩のヒント」などで構成している。

開設までに必要なこととして、「参加対象者や案内方法、実施頻度などを決めておく」と説明。センター主催の開設準備講座(29日午後1時半から高島市の安曇川公民館、8月3日午後7時から甲賀市の水口社会福祉センター)への参加や社会福祉協議会への相談も勧めている。

運営面では、対象者を限定していないケースのほか、ひとり親家庭を中心に声をかけている例などを紹介。スタッフはボランティアを募ったり自治会内で当番制にしたりするケースがあり、費用は自治会などから協力金や食材の提供を得ている例を示した。

センターのホームページ(<http://www.shiga-enishi.jp/>)、郵送での取得も可能。

子ども食堂は福祉団体などが県内約70か所で展開しており、事務局の県社協は「それぞれのニーズに合ったやり方を見つけてもらえれば」と手引書の活用を呼びかけている。

問い合わせは県社協(077・569・4650)へ。

#### 大きな文字の漢字字典 書体も工夫 弱視の子、学びやすく 東京新聞 2017年7月9日



弱視や学習障害(LD)の子も学びやすく。視覚障害者向けの出版事業などを手掛ける東京の社会福祉法人が、小学校で習う全ての漢字を収めた「大きな文字の漢字字典」を刊行した＝写真。漢字の大きさは約7センチ角で、弱視やLDの人が見やすいよう開発された書体を使うなど工夫を凝らした。

東京都新宿区の「桜雲会」が発行。2020年度の次期学習指導要領で追加される20字を含む1026字を、1ページに1字掲載し、読みや用例、部首などを示した。文字の大きさは、弱視の人の意見を聞いて決めた。

「丸教体」と名付けた書体は、教科書体の骨格を生かしつつ、線の太さが丸ゴシック体のようにおおむね均一なのが特徴。弱視者や、LDの一つである読み書き障害(ディスレクシア)の人にとって、教科書体は起筆や終筆

の形が複雑などの理由から見づらいことを踏まえ、フォント制作会社「字游工房」(新宿区)

が開発した。

B5判、上下と索引の全3巻セットで税込み6480円。問い合わせは桜雲会、電話03(5337)7866。

### 若年性認知症、支援策など紹介 篠山で講演会

神戸新聞 2017年7月9日

若年性認知症の人や家族を取り巻く生活課題について語る三木信子さん＝篠山市民センター



45歳以降で発症の確率が高まり、仕事や子育て世代に影響が大きい「若年性認知症」について解説する講演会が8日、兵庫県篠山市黒岡の市民センターであった。ひょうご若年性認知症生活支援相談センターの三木信子さんが、患者と家族の生活課題や支援策を紹介し、「本人ができる範囲で社会生活を維持できるように周囲の支援を」と訴えた。

2009年の厚労省推計によると、65歳未満で発症する若年性認知症患者は全国では約3万8千人。県内でも約1600人がいるとされ、患者らへの理解を深めてもらおうと篠山市地域福祉課が企画した。

三木さんによると、患者と家族は、ローンや教育費などの負担を抱えながら離職を迫られて収入が減る経済的悩みと、配偶者が急に介護対象となることで従来の人間関係が崩れる心理的悩みに直面するという。また、患者の多くが、兆候があっても自分が認知症と思わず受診が遅れる傾向を指摘。「早期受診によって行政や周囲のサポートを得る相談もできる」と説いた。

また、食事や運動など生活改善による予防策に加え、発症した場合も職業評価などで苦手になっている点を見極め、そこをカバーする働き方や職務の工夫によって「周囲の支援で、早急な離職を避ける手だてを」と話していた。

相談窓口は市地域福祉課もの忘れ相談センターTEL079・552・5346（尾藤央一）

### 避難所自動解錠ボックスを導入 千葉 富津

NHKニュース 2017年7月9日

千葉県富津市は大地震が発生した場合、避難所の管理者がいない夜間や、休日でも住民が避難所に入れるよう、強い揺れを感知すると建物の鍵を保管するボックスの鍵が自動的に解除される装置を導入しました。

富津市が装置を導入したのは、大地震の際に指定避難所となる市内の4つの小中学校の体育館です。

管理者がいない夜間や休日に地震が発生しても、避難して来た住民が鍵を使って建物の中に入れるよう、震度5弱以上の揺れを感知すると鍵を保管しているボックスの鍵が自動的に解除される仕組みになっています。

ボックスの中には鍵のほかに、懐中電灯や避難所の建物が安全かを判断するためのチェックリストなどが入っていて、最初に避難所に来た人が安全を確認しながら建物に入れるようになっています。

こうした装置は全国の自治体が導入を進めていますが、富津市によりますと、千葉県内ではまだ少ないということです。

富津市防災安全課の小野田隆博課長は「住民が安心して避難できる場所を確保するため、市内にあるほかの小中学校の体育館にも順次設置を進めたい」と話しています。

### 隠し続けた母のハンセン病 家族の想い

カンテレ報道ランナー 2017年7月6日

国の誤った政策で隔離され、苦難の人生を歩んできた「ハンセン病」の元患者の人達。

実はその「家族」も、同じように差別と偏見に苦しんできた事は、あまり知られていません。

いま、その家族たちが国に裁判を起こし、ふたをされかけた過去に光を当てようとしています。



【黄光男さん】「恥でないものを恥とするとき、本当の恥になる。この言葉にグサッときました」隠してきた家族の「ハンセン病」。顔をあげて、語っていこうと決意しました。

今月3日、熊本である裁判が開かれました。「元ハンセン病患者」の家族が国を訴えた裁判です。原告団副団長は、兵庫県尼崎市に住む黄光男（ファン グァンナム）さん（61）です。



【黄さん】「現在も、心のどこかでハンセン病って恥ずかしいな、人前で言いにくいな、っていう気持ちは無くなって無いです」「家族がハンセン病患者だった」、黄さんは、最近までそのことを隠していました。

弱い感染力なのに、恐ろしい伝染病と宣伝。強制隔離で「根絶」を目指します。市民も患者を怖がり、地域から排除しようと協力しました。薬で完治する病気になっても、1996年まで隔離政策が続きました。

ハンセン病はかつて「らい病」と呼ばれ、「遺伝」や「前世の報い」と誤解されてきました。感覚麻痺などが出て、後遺症も目立ったため差別の対象となりました。国は、



ハンセン病の問題が注目を集めたのは、2001年。隔離政策が憲法に違反する人権侵害だった、元患者が国を訴えた裁判で、国の過ちが断罪されたのです。国は控訴せず判決は確定、謝罪しました。この問題は終わった、多くの人がそう思いました。

しかし……

【黄さん】「あの裁判は勝ったけど、国の誤った、とんでもない法律が悪かった、で終わっている。今度の家族裁判は、一般市

民が犯した罪のために、どんな被害を被ったかが争点になっているでしょ」

黄さんが一歳の時、大阪で母親がハンセン病になりました。

「家族が（銭湯に）一緒に行ったら、全員入浴を断られて」

母親の病気をきっかけに、家族が地域の人から風呂に入るのも断られ、差別されるようになったのです。

母親は地域にいられなくなり、大阪府の職員に岡山の療養所へ連れて行かれました。黄さんは児童養護施設に預けられ、9歳になったとき、母親と再会しました。

【黄さん】「何の病気と聞いたときに声を潜めて、らい病といった。



そのしぐさが誰にも言うてはだよめと思わせるのに十分な」

ハンセン病を、知られることは恐ろしいことでした。隔離政策に携わった公務員の手記



には、家族達の苦難が記されています。身内に患者がいるだけで、婚約が破棄されたり、自殺者がでました。

【家族の問題を研究する東北学院大学黒坂愛衣准教授】「家族の人も非常に厳しい差別の対象になった。そんな歴史はわすれるわけですよ、排除してきたほうっていうのは。だけど、それを必死になって隠してきた側は、隠すことで身をもまってきた側は忘れない」

黄さんは、結婚する時にも、母親の病気を隠しました。友人にも話さずにきました。

【黄さん】「あの当時、ハンセン病は僕の心の中では、心の奥底に秘めておくもの、隠そうとして言わないのではなく、完全に忘れ去ろうとした。これは人前で言うべき話でないと思いついて」

理不尽だと気がついたのは、同じ苦悩をもつ「家族」が集まるようになってからです。なぜ隠れてしか集まれないのか。現状を変えたい。裁判をしようという声が上がりました。

「家族も国の政策で深刻な被害をこうむった」として去年、国に謝罪と賠償を求め提訴しました。568人の原告のほとんどが顔を出せないなか、黄さんは副団長として決意しました。

裁判での意見陳述。「幼くして家族と引き離され、本当の意味の親子関係が最後まで築けなかった」と、自身の被害を涙ながらに語りました。

【黄さん記者会見】「家族もハンセン病当事者も、本当にこのことで、苦しんでいる人たちが目の前にたくさんいるとはっきり見て欲しい」語ることで、ずっと避けてきたハンセン病問題と向き合い始めています。

関西には、療養所を退所した元患者の人達が多く暮らします。国が政策の過ちを認めた後、少しずつカミングアウトする人が出てきました。黄さんは、最近、交流を始めています。

【黄さん】「退所された人たちが、こういう風に仲間同士で昼から飲んでわきあいあいとする。こういう事をしているのがすごいと思う。家族の会のグループで、こういう風に、花見が出来たらいいなと思います」

語ることで、自分自身も変わってきたと感じています。裁判は、そのきっかけとなっています。

